

浮田和民とL・L・ジェインズ大尉の人間的交流

—浮田文庫書簡などを通して—

石 井 容 子

一 はじめに

ジェインズ大尉が熊本洋學校教師時代の日常を綴った *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Fundamentalism* (同志社々史々料編集所・編。以下『クマモト』とする。) には、その後、同志社英學校に進学し、同志社の屋台骨となった熊本洋學校生の名前が挙がっている。

ある日、「どれが最も優れた基督教か教えて下さい」とジェインズに質問した市原盛宏に、ジェインズは、翌日夕方この質問に関心を持つ生徒すべてに返事をした、と告げた。市原が連れてきた学友は、山崎為徳、金森通倫、下村孝太郎、伊勢(横井)時雄、宮川経輝、海老名喜三郎(彈正)、不破唯次郎、浮田和民と記されており、浮田の名前は最後に見られる。そして、他愛のない話で再度『クマモト』に登場し、浮田の名前は同書で二度しか見ることができない。しかし、あと一か所、浮田と考えられる人物が無記名のままに登場する場面がある。

そして、現在―一八九一年五月―、このアーナーバー (Ann Arbor, Mich.) で、教え子の一人が私にこう言った。「熊本の『ボーイ達』は、同志社の主要な学部をすべて掌握しています。小崎弘道は、新鳥襄の跡を継いで、同志社の社長になりました。下村孝太郎は、理化学科「理化学校」の学科長「教頭」を務めています。市原盛宏はイェール大学での学業を終え、再び同志社で教授職に就きます。森田久萬人は、最近、イェール大学で東洋哲学の講師に任命されたばかりで、来年帰国し、市原や宮川経輝と合流する予定です。そして、他の同級の四、五人が、この偉大なる学校の他の学部で管理運営の仕事に携わっています。」(第三十二章)

ただし、小崎弘道が、新鳥襄の後継者として同志社の社長に就任したのは、彼が同志社社員會で社長に推挙された一八九二(明治二五)年四月十八日以降である(『廿五年度報告』)。従って、ジェインズが第三十二章で記した日付は、彼の勘違いによる間違いか、彼の編集の過誤だと考えられる。

一方、ジェインズが浮田和民に宛てた書簡(書簡②、本稿第三節参照)には、I have been working「執筆活動」night and day since you left…(下線付記)と、書簡の日付から、明治二十五年九月以前に、浮田が、アーナーバーに住むジェインズに面会した事実が記されている。浮田は、明治二十五年六月二十四日に同志社第十七學年度卒業式と送別會に出席したあと、イェール大学に留学するために渡米した。着米早々、旧師ジェインズ宅に足を運んだのであろう。

小崎の社長就任を確認し、米国で旧師と面会することができた「教え子の一人」とは、浮田和民である。

浮田は、帰米した旧師のもとを訪ねて、同志社に所属する朋友の近況を伝えるという重要な任務を果たした

にも拘らず、彼は名もない「教え子の一人」と処理され、イェール大学に所属することにも触れられていない。さらに、『クマモト』の巻末では、東京専門學校に移籍した浮田の所屬は、「福澤大学歴史学教授」と記されている。浮田本人に至っては、後年「私の如きは同志社出身者として一向成功といふ幸運には接しなかった」とまで回顧した。

浮田は、ジェインズにとって熟知するに値しない人物だったのだろうか―それは否である。

二 国粹理念溢れる思想家・浮田和民と孤高の宗教家・ジェインズ

幕末期に世界に門戸を開いた日本は、その後国を挙げて近代国家への道(一)を模索する。すると、祖国よりも高い地位と給与を求めて御雇外国人が日本に押し寄せた。熊本洋學校に「英學教師」として赴任した米国退役軍人 L・L・ジェインズ大尉もその一人である。日本は、当初、近代科学文化において絶対的な知識と実践を持つ御雇外国人の指導を受けざるを得なかったが、ひたすら富国強兵に務め、国力が付くと人件費のかかる外人を解雇していった。そのため、日本は西洋諸国に不義理を働いたと言う者もいた。しかし、日本国側は、自分達が頼んでもいない宗教教師「宣教師」の来日は別として、西洋からの電信技術、鉄道、学校制度、装甲艦、軍紀概念の摂取が無料で済んだことは一切なく、それなりに大金を費やした、と主張したという。

はるか昔から、中国は日本の精神的な師であり、近年に入ると西洋は日本の実践の師であった。ところが、一八九四(明治二七)年七月、朝鮮半島の覇権を巡って日清戦争が勃発すると、日本はこれまでになく中国侵略に意欲を燃やした。小国日本が覚醒して、中国の大軍隊と対峙したことに、世界が祝意を示すことは尤もなことであった。日清戦争は、中国や西洋の優等な生徒であった日本が豹変した瞬間であったのかもしれない。

この戦争を挟んで、日本と諸外国との関係が変容する。(『クマモト』)

このような状況の中で、外国人読者から注目を受けた日本人評論家があった。浮田和民である。浮田和民は、一八七一年(明治四)年、熊本洋學校に一級生として入学した。一八七六(明治九)年に、海老名弾正、宮川經輝、横井時雄、金森通倫らと奉教趣意書に署名して世間を騒がせたあと、同志社英學校に進学した所謂「熊本バンド」と呼ばれたグループの一人である。

一八九四(明治二七)年、在米中の浮田和民―A Japanese in America. K. Ukita―が投稿した論文が、以下のように論評された。「欧米人と全く異なった視点で、全く異なった切り口から繰り出される浮田の信念には、小気味よいほど率直に日本人の感情が鏤められている。精神主義を信条とする日本人ならではの浮田の確信は、現実主義を信条とする外国人から見れば不正確であり、さらには間違いだと言指されたところがあったものの、興味深い考え方であったため、外国人読者は、彼の間違いさえ容認できた。」というのである。当時は、西洋にかぶれた日本人が「軽薄な」論評を数多く出した時期でもあった。しかし、浮田のように分かりやすい英語で述べた自由な言論にほとんど出会うことがないので、彼の言説を聞くと、本当に胸のすく思いがするというのである。(Alfarcadio Hearn)

この論評は、遡ること二十年足らず前の明治九年、熊本を離れ、大坂英語學校に勤め始めたジェインズと、同志社英學校に進学した熊本洋學校のクリスチャン生徒に関して、「ジェインズ大尉は、簡単な用語で現地の人々に福音を説こうと試みる一流の人物です。彼の教え子である熊本「洋學校」の若者達は、私の聞き及ぶ中で、祈祷や説教の際には、誰もが理解できるように、ごく簡単な用語を使って説いた最初の日本人伝道師です…」(A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Nov. 3, 1876.)と本部ボストンに報告されたア

リカン・ボード宣教師書簡を髣髴とさせる。

本稿では、熊本洋學校英学教師ジェインズと並列して、熊本洋學校卒業生浮田和民を取り上げた。それは、日本に近代評論が流入したばかりの時期に、外国人が違和感を覚えながらもその独特な評論が評価された浮田と、生涯平信徒を貫いたにも拘らず、当初、同志社カレッジの校長に推挙され、基督教海外宣教師団体アメリカン・ボード宣教師団に支持称賛されたジェインズに、同じオーラを感じたためである。まず、ジェインズと浮田の履歴を追う。

※L・L・ジェインズと浮田和民の履歴

日本におけるジェインズの生業は、布教でなく、教育である。初任地は、熊本城内、古城（フルシロ）に所在した熊本洋學校で、着任は、明治四（一八七二）年九月一日だった。米国から招聘された退役軍人ジェインズ（Leroy Lansing Jones 1838-1909）は、洋學校が閉校するまでの五年間、二五〇名を超える土民（土族と平民）少年少女の秀才に英語で英学を教授する傍ら、熊本城外において、西洋農法を含む近代科学技術や文化のアドバイザーを務め、地域住民の福利厚生の上に尽力した。^(一)熊本で、直接或いは間接的に、彼の啓発を受けた者の数は計り知れない。

ジェインズは、一八七六（明治九）年十月七日に熊本を離れ、同年十一月一日から官立大坂英語學校に勤務した。しかし、半年足らずで同校を依願退職し、アメリカン・ボード（以下、ABC FMとする）の要請と援助を受け、一八七七（明治一〇）年五月に帰米した。校長職を約束された同志社カレッジの設立資金を調達するためであった。その後、およそ八年間、熊本の教え子達と連絡を取っていない。米国でのABC FM事業の

挫折と、長期に渡ったハリエット (Harriet W. Jones 1847-85) との離婚訴訟が原因したものと思われる。後者では、ジェインズの不貞行為が申し立てられたが、証拠がなく事実上ジェインズの勝訴という形で離婚が成立した。その後、ハリエットは実家で逝去した。ジェインズは、五人の実子を育てながら、十六年間米国にとどまるが、同志社第二代社長となった小崎弘道 (一八五六・一九三八) から熊本洋學校の教え子達の尽力で再来日する。一八九三 (明治二六) 年八月二十五日から二年間、第三高等中學校 (途中、第三高等學校に改称) に、一八九七 (明治三〇) 年一月二十五日から鹿兒島縣尋常中學造士館に半年ほど奉職した。最後の赴任校、第三高等學校 (一八九七年 (明治三〇) 年八月一日・一八九九 (明治三二) 年七月三十一日) を満期退職したあとは米国に戻り、一九〇九 (明治四二) 年に召天した。

一方、浮田和民 (一八六〇・一九四六) は、洋學校在学中の一八七六 (明治九) 年一月三十日、聖書研究を続けた洋學校生徒有志と共に、花岡山山上で「奉教趣意書」に署名し、キリストの精神に従って民族さらには人類のために一生を捧げることを誓った (花岡山結盟事件)。ジェインズは、同年四月に、基督教を信仰する生徒に洗礼を授けている。受洗者は、不破唯次郎、上原方立、小崎弘道、由布武三郎、市原盛宏、岡田松生、下村孝太郎、藏原惟郭、辻 (家永) 豊吉、和田正脩、浮田和民、古莊三郎、宮川經輝、林治定、森田久萬人、赤嶺瀬一郎、加藤勇次郎らであった。洗礼名はトマス浮田。浮田は、病気のため一年遅れて、明治九年に熊本洋學校を卒業した。

その直後、洋學校が閉鎖されると、彼は、洋學校の他のクリスチャン生徒と共に官許同志社英學校に入学した。のちに浮田の研究分野の一つとなる政治経済学は、宗教の他、自然科学も講じたイェール大学首席卒業生ラーネッド (Dwight Whitney Learned 1848-1943) が担当した。

さて、浮田文庫（本稿第三節参照）には『同志社時報』が二部保管されているが、そのうち、大正十四年十月発行の機関紙には、ラーネッド博士の特集が組まれ、浮田も寄稿している。その文章は明晰で、綴られているラーネッド教授の逸話―承知しないことには、あたかも孔子の格言の如く、I don't know. の回答を貰いたこと、ラーネッド教授の経済学講義が好評を博し、第一高等學校^{マコ}の教科書に採用されたことなどは、後年、同志社関係の多くの論文、書籍、講演などで取り上げられた。当該機関紙の他、ラーネッド教授の委託で浮田が和訳した『經濟學之原理』（一八九二年、再版）も、浮田文庫に収蔵されている。

浮田は、一八七九（同十二）年六月十二日、十四名の熊本洋學校の朋友と共に、第一回卒業生として神学の特別三年課程を修了した。大阪、神戸に滞在したあと東上し、『六合雜誌』に関わったが、新島襄の要請を受け入れ、一八八六（同十九）年に同志社の教員となる。明治二十五年六月、イエール大学教授 G・T・ラッド博士（George Trumbull Ladd 1842-1921）が同志社で哲学の講義を行った。浮田教授は、同月の卒業式を終えたあと渡米して、イエール大学でラッド氏に師事し、史学、政治学、政治史を研学した。彼は、明治二十七年四月十九日に同志社に着し、翌五月七日から毎日一時間ずつ授業を始めている。

その後、浮田は、アメリカン・ボード宣教師たちとの対立で同志社を去り、一八九七（明治三〇）年五月、東京専門學校に移籍した。一九〇〇（同三三）年二月から一九〇二（同三五）年八月まで、東京専門學校圖書館長を務め、一九〇四（同三七）三月より一九〇九（同四二）年七月まで、改称された早稲田大學高等師範部長として教務を掌理した。一九〇九（明治四二）年二月から一九一九（大正八）年六月までは、学校教育の傍ら、総合雑誌『太陽』の主幹となり、社会教育に従事した。一九四一（昭和一六）年五月十五日、早稲田大學を退職し（同大學名誉教授）、一九四六（昭和二一）年十月二十八日、東京都豊島区高田本町の自宅にて八十八才で

逝去した。(『浮田和民先生追懷録』、『七十年の回顧』、同志社『廿五年度報告』、『廿六年度報告』、『廿七年度報告』、及び『廿八年度報告』、『近代日本哲学思想家辞典』(ほか))

三 早稲田大学が所蔵するジェインズ関係資料

小崎弘道は、「…彼「ジェインズ」の遺稿の大部分は未亡人より浮田和民君宛てに送り来り今尚ほ早稲田大学の圖書館に藏めてある…」(『七十年の回顧』)という興味深い回顧録^(三)を残している。筆者は、小崎のこの陳述文によって、浮田和民の蔵書及び関係資料を収蔵する「浮田文庫」の存在を知り、本稿で用いる資料に巡り合うことができた。その中から、本稿では、主として、以下の書簡と資料を用いる。

- ① A true copy of the paper furnished at the request of the States Attorney for Cook County, Ill. for the trial of Dr. Harry Scudder for the murder of Mrs. Duntton—embodying Lois H. Janes' testimony in that case. (ジェインズが浮田に送った英文資料)
- ② A letter from L. L. Janes, ANN ARBOR, Michigan, to K. Ukita, New Haven, Conn., dated on Sept. 29, 1892. (書簡と封筒、原本及び複写)
- ③ A letter from L. L. Janes, ANN ARBOR, Michigan, to K. Ukita, New Haven, Conn., dated on Oct. 4, 1892. (書簡と封筒、原本及び複写)^(四)
- ④ A letter from L. L. Janes, ANN ARBOR, Michigan, to K. Ukita, New Haven, Conn., dated on Jan. 9, 1893. (書簡と封筒、原本及び複写)

- ⑤ A letter from L. L. James, to K. Ukita, dated on Apr. 16, 1895.
 (書簡、原本及び複写、封筒欠)
- ⑥ A letter from L. L. James, Kagoshima, Japan, to Kazutami Ukita, Kyoto, Japan, dated on Aug. 12, 1896.
 (書簡、原本及び複写、封筒欠)
- ⑦ A letter from L. L. James, Kagoshima, Japan, to Kazutami Ukita, Kyoto, Japan, dated on Aug. 14, 1896.
 (書簡、複写、封筒欠)
- ⑧ A letter from Capt. L. L. James, Kagoshima, Japan, to Prof. K. Ukita, Doshisha Kyoto, Japan, dated on Feb. 16, 1897. (書簡と封筒、原本及び複写)
- ⑨ A letter from Flora James, San Jose, Cal. to Mr. Ebina, Pastor of Kumiai Church, Tokio, Japan, dated on Aug. 7, 1909. (書簡と封筒、原本及び複写)

右記九通の文書には、ロイス (Lois H. James) の供述書①と、後妻フロラ (Flora O. James) が組合教会牧師、海老名弾正に宛てた書簡⑨が含まれている。②から⑧の七通は、ジェインズが浮田和民に宛てた書簡である。日付の古い三通——一八九二年九月二十九日付書簡②、同年十月四日付書簡③及び一八九三年一月九日付書簡④——は、ミシガン州アナバーに居住するジェインズから、コネチカット州ニューヘヴン・エルム通り四三九号、即ち、イエール大学に留学していた浮田に、一八九五(明治二八)年四月十六日付書簡⑤(五)は、三高のジェインズから同志社の浮田に、一八九六年八月十二日付書簡⑥、同年八月十四日付書簡⑦及び一八九七年二月十六日付書簡⑧は、鹿兒島に渡ったジェインズから京都の浮田に差出されている。

次に、これらの書簡などを通して読み取ることのできた真相や、二人の濃厚な交流について、以下に詳記したい。

(一) ジェインズの一時帰米時代の書簡―イェール大学留学中の浮田との交流

書簡に記されたジェインズの住所は、46 East University Ave., ANN ARBOR, Michigan. となっている。これは、ミシガン大学に通う子供達の便宜を図って、オハイオ州から移り住んだためである。後妻となるフロラも、ミシガン大学の卒業生だった。

一八九二(明治二五)年、帰米し十五年を迎えたジェインズは、留学のため米国に渡った浮田と書簡を取り交わし、日付の古い書簡②で、元妻故ハリエットの抱えていた持病を説明した。

実は、ハリエットの持病は、『クマモト』でも触れられている。ジェインズは、『クマモト』において、愛すべき子供達や彼自身については実名を記しているが、妻ハリエットに関しては、「白人女性」、或いは、「西洋の妻」、病気がちの「母親」などと紹介し、実名を挙げていない。ハリエットに代わって家事育児を行ったのは、気立りが良く有能な四人から六人の使用人だった。「乳母が子供を見ってくれるので、母親は贅沢なお昼寝を楽しむことができた」ともジェインズは述べている。さらに、ジェインズが洋學校を欠勤したのは一日だったが、それは、一〇〇マイル「約一六〇km」以内に白人の医師がおらず、キセルをふかした鉄漿の老婆に子供を取り上げてもらう気になれなくて、自分がどうあっても助産夫、看護師、立会人の三役を務めざるを得なかったためだ、と記した。ハリエット自身が繰り返し言う言葉を信じるなら、母親も赤ん坊も産後の経過は良くなかったという。ハリエットは、北米外邦伝道史上名門の牧師スカダーの娘で、気が強く、官舎では夫婦喧嘩が絶えなかったと

熊本生徒達は回顧した。勝気ながら、病弱で家事や育児ができないハリエットに関して、ジェインズが『クマモト』に書き残したのが、「妻は持病―家系的な病氣―を持っていた」という情報だったのである。

さらに、書簡②^(六)からは、浮田和民がハリエットの病名 *Prolapsus Uteri* 子宮脱を理解できず、旧師にそれを問い返していたことが読み取れる。ジェインズは、浮田に以下の回答をした。

「子宮脱」に関して、ジェインズ夫人「ハリエット」は、第二子リロイ「ロイ」即ち、ヘンリー」を出産したあと、スカダー博士「ハリエットの実父」自身が、これ以上ひどい例を見たことがないと言った程、彼女は相当苦しみ、博士は、娘が渡日する直前まで、彼女の治療を行ったニューヨークのシムズ博士の病院に、何度か付き添った程でした。スカダー博士が私に告げたのは、これは『子宮が体から飛び出る』症状だと言うことでした。ジェインズ夫人の母であるスカダー博士夫人は、インドで同じ病氣のために六か月ベッドで暮らしました。ジェインズ夫人の妹、ケイティは、二、三年前にカリフォルニアで未婚のまま亡くなりましたが、同じ病氣の治療をかなりの時間やはりシムズ博士から受けていました。これは、家系の病氣でした。(書簡②)

ハリエットは、子宮が正常な位置から外部に飛び出る「子宮脱」のため、第一子を除き、毎回産後にこの病氣で苦しんでいたというのである。「子宮脱」は、しばしば精神錯乱を併発する疾患として知られていた。彼女は、ファニー「バーティ」とヘンリーの二人の子供を連れて渡日し、熊本滞在中にロイスとユーニス・アンの二子を、帰米後には末子イライシャ・ポールを出産した。多くの子供を授かったハリエットがこの病氣の苦しみから逃

れることができたのは、妊娠期間だけだったのである。ジェインズは、これが事実であるなら、五人の子供を持つべきではなかった、と浮田に告白した。さらに、舅のスカダー博士は、自らを資格のある内科医だと主張しながら、ハリエットの病気には知らぬ顔をし、姑スカダー博士夫人に至っては、ハリエットに結婚生活に耐えるような躰をしなかつたばかりか、男性のような性格と振舞いの姑はスカダー博士よりもひどい人であった、とジェインズは同書簡で証言している。

渡日以前のジェインズは軍役と農場経営の世界しか知らない。その後、日本で教育界以外に繋がりを持ったのが宗教界だった。しかし、その窓口に当たるスカダーとABC FMは、ジェインズは不貞を働き、また、日本の第一線で活躍する熊本のカリスチャン生徒を基督教生活に導いたのはハリエットの功績だったと述べ、ジェインズの名譽を傷つけた。

ハリエットの実弟ハリー・スカダー博士 (Henry Martyn Scudder Jr. 1852-92) が、後妻の養母ダントン夫人殺害容疑で告発されると、ロイスは検事の要請で供述書①^(七)を提出した。ハリエットは、離婚訴訟敗訴後、ロイスを頭に年少の三人の子供を連れてシカゴの実家で暮らした。ロイスは、供述書で、母の壮絶な暮らしと不審死を記し、「ハリー・スカダー博士は母も殺害した可能性がある」と申し立てている。

そのハリーが獄中で自殺を遂げたあと、ジェインズは浮田に書簡を送付した。元舅スカダー博士が、ハリエットの病を口実にして、しかも人を使って、ジェインズと彼の子供達に仕打ちを与えてきたというのである。ABC FM 宣教師団は、スカダー博士の完璧な人格を主張することで、自分達の助言や告白に重みをつけている節があり、ABC FM のグリーン博士に至っては、「しかし、私もスカダー博士「の言い分」を信じます」と倫理と良識に欠ける発言をした、とジェインズは書き記した。彼は、スカダー家の三人、即ち、スカダー博士と

彼の息子のハリーそしてドリーマスの残忍さや偽善醜行の証拠を、近いうちに浮田に送付するが、それらの資料で同志社の外国人宣教師団の目が覚めてくれればと付言した。ジェインズは、教え子達に、その証拠を公開するまでは自重するようにと諭す一方で、「スカダー家の宣教師としてのキャリアは終わった」とも述べている（書簡②）。

スカダー家も ABCFM も、主イエスの時代の「ファリサイ人」、つまり、伝統を追い求める偽善者の体質を受け継いでいる、とジェインズは考えた。他方、ジェインズも熊本バンドも、自分達はキリストと共に苦しみ、真実を経験したキリストの魂は自分達の魂に深く根を下ろしている、と考えた。このような背景のもとで、然るべき引き金があれば、キリストの側に立つと主張するジェインズや熊本バンドと、ジェインズが「ファリサイ人」と呼ぶスカダー家や ABCFM との間に、軋轢が生じるのは当然のことであろう。ジェインズは、同志社独立問題で ABCFM 宣教師と対立する教え子達には助言を与え、熊本着任以来二十年を経ても、彼らの羅針盤であり続けようとした。

ABCFM 宣教師団は、スカダー博士への気遣いから、ジェインズの功績を認めようとしなかったのだろう。熊本バンドは、一八九三年春の日本組合基督教教会会議で、彼らを大いに非難した。⁽¹⁾ 浮田和民は、手記「歸郷後のヂエンス先生」〔『日本に於ける大尉ヂエーンズ氏』〕で、ハリエットの持病を含め、在米中のジェインズの情報などを赤裸々に暴露した。日本人読者は度胆を抜かれたに違いない。浮田は、ABCFM に数回書面で旧師ジェインズの名譽を回復するよう求めたが、「ヂエンス事件に對しては宣教師中一人の是を辨護するもの無かりし」と残り、浮田の願いが届くことはなかった。浮田の手記に綴られた旧師の近況の主たる出所が、イェール大学留学時代に旧師から届いた書簡や資料（浮田文庫）であったことは紛れもない事実である。

ジェインズが米国に残していた僅かな財産は、帰米すると減価していた。財産は訴訟問題で使い果たし、日本から持ち帰ったお金は子供達の教育に充てた。そのため、アナーバーで暮らした七年間、ジェインズ家の家計は赤字続きだった(書簡④)。一時帰米した当初から、米国にはジェインズの力が発揮できる場所はないと考え、日本で復職したいと考えた(A letter from L. L. James, St. Dennis, Maryland, to N. G. Clark, Boston, dated on Jan. 7, 1878)が、再渡日できないまま十六年が経過しようとしていた。しかし、ジェインズは、書簡④(九)で、九月から二年間日本に滞在することを示唆し、当時住んでいた広い家を売却して子供達が教育を終えるまで住めるような小さな家をつくるつもりだ、と浮田に述べた。整理すると、この書簡が書かれた一八九三(明治二六)年一月には、ジェインズは熊本の教え子達の協力を得て、九月の再来日―実際には一八九三(明治二六)年八月二十五日に京都第三高等中學校赴任―をほぼ手中にしていたことになる。

(二) ジェインズの再来日期の書簡

一八九三(明治二六)年の夏、ジェインズは、渡日直前に結婚したフロラと共に入洛し、京都第三高等中學校に赴任した。フロラは、洋學校一級生、横井時雄より三歳年下である。

同年十月二十一日、十二月二日及び九日、ジェインズは同志社で講演した(「明治廿六年度記事」)。そこで、宗教における旧体制に異議を唱え、奴隷解放論者であったために長老派教会から追放された父の名譽を回復するための言葉(二〇)を付言した。同志社講演は、まさに、ジェインズが「熊本の事業と熊本バンドの両方の敵が語った嘆かわしい嘘や誤った主張に対して、包括的な回答をする好機」(書簡④)だったといえよう。

ジェインズは、再来日後も、「君達は、独立と真の啓発を目指し、「花岡山事件後の迫害という第一の試練を

経て」同志社を再生させるといふ第二の試練の舞台に立ち、ABC FM 宣教師団と闘っていますが、実際には、自由、良心、啓発を求めて、悪意のある信念と闘っているのです。」(書簡⑥)と述べ、書簡⑧においては、ABC FM 宣教師団の啓発の道に反する言動に異議を唱えてきた浮田の高貴で無欲な働きを称えている。換言すると、ジェインズからの書簡は、浮田ら熊本バンドと思想を共有する場、延いては、教え子達に同志社独立運動の大義名分を確認させる場であったことが窺える。

書簡⑤では、喜びに満ちた文面で、来熊時二歳だったファニー (Frances Elizabeth Jones) が大学研究者と結婚し、親として肩の荷が下りたことを浮田に報告した。

ジェインズは、一八九五(明治二八)年七月末日に第三高等中學校から改称した第三高等學校を満期退職した。次の赴任先が官立学校であれば、ジェインズの異動に関する学務文書やそれを文部省に報告する公文書が、国立国会図書館や後身大学に保存されていなければならないが、該当文書が見つからない。つまり、彼が三高を退職する前に、三高がジェインズの異動文書を作成して、彼の転任校と連絡を取った形跡が見られないのである。ジェインズが明治二十八年七月末日に第三高等學校を退いて二か月余り経た十月三日、三高から二通の文書が出された。「雇外國人満期解備通知」(一〇)と、ジェインズ夫婦が官舎を出立したことを知らせる通知文(京都市上京区役所宛て)(一一)である。それから二年後、ジェインズは、第三高等學校に再赴任した。要するに、現存し確認できる公文書だけでは、ジェインズ一家が官舎を出た明治二十八年十月から、第三高等學校に再赴任した明治三十年八月までの、およそ一年十か月の消息が掴めない。ところが、ジェインズが浮田に宛てた書簡(浮田文庫)と、周辺の資料を抱き合わせて検証すると、ジェインズの動向、さらには彼の揺れ動く心情までも浮かび上がらせることができたのである。

前者「雇外國人満期解備通知」において、家族欄にはジェインズ夫妻の名前だけが記されていた。しかし、浮田に宛てた一八九六年八月十二日付の書簡⑥^(一三)には、「Even little baby, 2 years old…」という文言があり、ここにおいて、公文書だけでは確認できなかったジェインズ家の新しい家族を確認することができる。第三高等中学校在職中の一八九四(明治二七)年に、フロラとの第一子フィル^(一四)(Philodore James)が授かっていたのである。前段落において、三高を満期退職したジェインズの退舎が遅れたのは、恐らく、次の仕事ばかりか、幼い子供を抱えて落ち着く宿所さえ見つからなかったためであろう。

さて、三高退舎から鹿児島島立までの期間の後半期にあたる一八九六(明治二九)年五月のABC FM宣教師書簡には、熊本バンドとの軋轢が激化した末、ABC FM宣教師が京都を去って空き家になった宣教師館に浮田和民が立ち寄って、ジェインズが宣教師館に住むことができないか尋ねていた^(一五)ことが記されている。熊本バンドが同志社を「同族」支配していると非難されていた中、浮田は更なる批判を覚悟したうえで、旧師ジェインズ一家のために彼らの仮宿を探していたのであろう。

さらに、書簡⑧^(一六)を見ると、ジェインズは、三高退舎後、一時期、「京都ホテルに籠って」執筆活動をしていたことが認められた。也阿弥(ヤアミ)樓が常盤ホテルを買収し、常盤ホテルの一部が改修されて「京都ホテル」が誕生したが、やっと京都ホテルが開業にこぎつけたのは、平安遷都千百年記念の年であり、第四回内國勸業博覧會が京都で開催された一八九五(明治二八)年三月のことである(『日出新聞』)。田村初太郎の書簡(明治二六年八月二十三日付)によると、常盤ホテルは、再来日したばかりのジェインズと新妻フロラが折田彦市校長と会食した場所であり、也阿弥ホテルと京都ホテルは、後年ジェインズが浮田に茶の購入を依頼した場所である。「京都ホテル」は、ジェインズが三高官舎を退去した一八九五(明治二八)年十月から、鹿児島

に立出する一八九六（明治二九）年七月二十日まで、実際に京都ホテルとして営業されており、ジェインズ一家が鹿兒島立出前の一時期に滞在した宿泊所と考えて差し支えないものと思われる。ただし、彼が滞在した期間などの詳細については不明である。

ジェインズは、鹿兒島に向けて「七月」二十日に出航し、二十一日に豊後海峡に入ったが、荒天に見舞われ、ミミズ「現、宮崎県日向市美々津（ミミツ）町」という港で二晩二日足止めを食い、二十四日の日の出前に鹿兒島湾に入港、その晩だけは粗末な旅館で過ごし、二十五日のうちに鹿兒島の家に着した（書簡⑥）。ジェインズが鹿兒島の地を踏んだのは、一八九六年（明治二九）年の七月下旬で、三高を満期解備になってから実是一年が経過しようとしていたことになる。ジェインズは、同年八月十二日現在、新しい造士館校長が到着する九月一日頃まで待機してほしいと言われていることを、浮田に伝えた。

それから半年後の翌年二月、書簡⑧で、ジェインズは、浮田に、前年造士館に関わる予定が次々と変わり、学校が廃校になったこと、さらに、伊藤（伯爵）内閣も崩壊した中で、十月に、鹿兒島の役人達が自宅にやって来て、高等の学校をつくる決心をしたので、もうしばらく我慢してほしいと告げたことを、浮田に報告した（書簡⑧）。

先行研究では、ジェインズの赴任した鹿兒島の学校は、「鹿兒島高等中学校造士館」或いは「鹿兒島の造士館高等中学校」ということになっている。ところが『近代日本総合年表』第四版（岩波書店、二〇〇一年）によると、明治二十九年九月三日、島津家の反対により高等学校への昇格が困難なため、（官立）「鹿兒島高等中学校造士館廃止」が告示されている。校長の到着が九月一日頃と予定され、その二日後に廃止が告示された学校に、給与の高い外国人教師を雇入れるとは考え難い。官立鹿兒島高等中学校造士館は、ジェインズが所属しないまま

廃校となったと考えてよいだろう。ジェインズは、鹿児島に到着して半年後の一八九七（明治三〇）年一月二十五日から再び教職に就いたと述べた（書簡⑧）が、学校名を表記していない。地元鹿児島の資料^{（二七）}を調べると、ジェインズが記した同じ日付、つまり、明治三十年一月二十五日に尋常中學造士館が開校されている。従って、ジェインズが赴任した学校は「鹿児島縣尋常中學造士館」^{（二八）}である。

書簡⑧の末尾には、ジェインズが、「お茶を送りましょうかと言ってくれて有難う」と浮田和民に礼を述べる文言がある。これは、既述の通り、半年前、ジェインズ一家が鹿児島に到着したばかりの頃、彼が浮田に京都のお茶の送付を依頼したことに由来する。ジェインズは、薩摩の茶は飲むと頭が痛くなる程強いので、京都も阿弥（ヤアミ）ホテルに売っている安くて口に合う一斤「約六百グラム」三十銭のお茶を二斤から四斤送ってほしい、と浮田に頼んだのである。彼は、「あの頃」、京都ホテルでの食事と同じお茶が出されていたようだったので、京都ホテルにも同じ茶が売っているかもしれない、と記している。それから半年後、浮田は、お茶が切れたのではないかと案じ、再度京茶の配送を申し出る書簡を送付した。その返信がジェインズの書簡⑧（一八九七年二月十六日付）だったのである。浮田の申し出に対し、ジェインズは「茶は」長崎から一箱買いましたので、恐らく年末までもつでしょう。」と、返書した。

ジェインズが浮田に所望したのは、茶だけではなくだった。彼は、まず、浮田から哲学史の良書を借りていた礼を述べたあと、茶のほか、サラダとなる葉野菜や豆類の種を幾種類か郵送してほしい、と浮田に要望した（書簡⑦）^{（二九）}。鹿児島で暮らし始めて二十日目のことである。食肉の入手が難しく、冬場は魚が品薄で値段の高い日本の僻地、鹿児島で、家族の命を繋ぐ豆類の種を依頼する彼の姿勢は真剣で、目当ての豆の特徴を詳しく説明しているほか、種苗店を、さらには立ち寄り寄る店舗の順番まで指定しているが、書簡の文言は、多忙な浮田に

面倒をかける気遣いで溢れている。書簡には、夕方、散歩がてらに茶と野菜の種を購入する用事を済ませてほしいと、浮田と、幼児を連れた浮田夫人^(三〇)のために、人力車二台分の費用を加えた為替が同封されていた。気配りを欠かさず、情け深いジェインズの人柄が窺える。

ジェインズの書簡は長行なものが多いが、浮田宛書簡^⑧も例外ではない。同書簡には、造士館廃校のほか、薩摩の若者が熊本のを視察して郷里鹿児島で教育を受ける決心をしたこと、不安定な政局を中央で支える政府官僚にすがって鹿児島が造士館の立て直しを図っていること、しかし、上記の理由のために、鹿児島に移ったもののジェインズに仕事はなく、彼が金銭的困難や精神的なストレスを抱えて生活をしていったこと、やっと、一月二十五日から、教育者の間でナチュラル・メソッドとして周知されている教育法に従って、週十六時間、造士館の生徒に英語を教え始めたこと、造士館の生徒達は熱心に勉学に励み、彼らの「英語で話す力」が驚く程の速さで上達していること、一八九六（明治二九）年十一月にジェインズ、続けて息子のフィルが重病を患ったこと―鹿児島島の粗悪な住宅環境で風邪を拗らせてしまったようである―、二年がかりで書いてきた本が一月五日に仕上がり、丁度その日付の書簡が浮田から届いたこと、諸外国と交易する鹿児島の人々にも啓発は必要であることなど、多岐に渡る情報が詳記されていた。

しかし、書簡^⑧に記載されている内容は上記の事項だけではない。ジェインズは京都に戻りたいと強く願っていたが、書簡^⑧を綴った明治三十年二月十六日の時点で、その大願が成就できる確約は一切なかった。しかし、四月を迎えると、ジェインズ再入洛への動きが活発になる。彼は、四月下旬に、第三高等學校英語教師の八月採用者として推挙^(三一)され、五月下旬には、紹介人のない状態で、三高への再雇用が認可^(三二)された。明治三十年十一月には、L・L・ジェインズ（英語、第三高等學校）と、エミル・ユンケル（ドイツ語、第四高等

學校)二名が、奏任^(三三)待遇されている。もともと学校数の少ない官立旧制高等学校において、外国人英語教師の欠員採用は、非常に狭き門だったはずだ。しかし、ジェインズは、希望する京都の官立学校への再雇用を成就させた。これは、ジェインズに強力なコネクションがあったからだと考えざるを得ない。

さて、浮田に宛てた書簡^⑧には、Mr. Oritaという人物が登場する。ジェインズは、Mr. Oritaの提案と要請に従って鹿児島で辛抱してきたことを浮田に告白し、「Mr. Oritaが長く今のポストにとどまること―このことは全く私の個人的利害を超えた話ですが―に望みをつないで、心から貴方達のいる京都に帰りたいと思っています。Mr. Oritaが京都に戻してくだされば、新しい学校の仕事をさせてください。これ以上のことはありません。」と述べている。そのうえで、「私はためにMr. Oritaに便りを書くことを控えています。もう一度京都に住み、再度雇用されたいという私の願望をぜひ聞き入れてほしいと懇練られたくないからです。」と苦しい胸の内を明かしているのである。

Mr. Orita―折田彦市は、一八八七(明治二〇)年から、第三高等中學校、引き続き改称された第三高等學校の学校長を一九一〇(明治四三)年まで務め、ジェインズが京都で奉職した期間、常に上司であり、近隣の官舎に居住した人物である。折田は、プリンストン大学卒業直前に洗礼を受けたものの、プリンストン長老派教会に所属せず、帰国後は、文部官僚、或いは、官立学校長という立場もあって、基督教の信仰や教育について語ることはなかった。^(三四) 書簡などジェインズの残した資料には一切触れられていないが、折田もクリスチャンだったのである。ジェインズの父も長老派教会に属した。書簡の文言と上記の状況から、旧薩摩藩士の折田彦市が、三高を退職したジェインズに折田の母校^(三五) 鹿児島造士館の教職の世話をしたことは、間違いないことだろう。

書簡の記述通りに、ジェインズが折田に三高再雇用を要望する書簡の送付を控えていたのであれば、ジェインズの三高再雇用が実現したのは、誠実な人柄であった折田が、ジェインズのそれまでの要望を踏まえ、忘れずにジェインズを京都に戻したか、或いは、同志社教授、浮田和民が、書簡を通してプライドの高い旧師の思いを知り、京都での再雇用を折田に言えない旧師に代わって、折田に直談判したか、または、官僚から教育職に転じた第三高等學校教授、吉田作彌（熊本洋學校及び同志社英學校卒業生）―同志社でも国際法講師を務め、横井時雄が同志社社長に就任した一八九七（明治三〇）年から同志社社員会に名を連ねた―が、旧師の意向を浮田或いは所属する同志社社員から聞き、上司である折田にジェインズの再雇用を示唆したかなどの、いずれかであろう。いずれの場合も推測の域を出ないが、各氏の性格と、以下、旧師ジェインズの人格を評価する吉田の口述文や、吉田ら学友との絆の深さを綴った浮田の手記などを考え合せると、それほど的外した推論ではないと考える。

熊本でゼンス「ジェインズ」は洋學校廢止後は京都同志社に行けとす、め、同志社に行けば其處には、人格高尚なる新島が居り、宣教師にデビスが居り、大阪にはゴルドンがあると云つたが、實際逢つたそれらの人々は、ゼンス程にインプレツシヴでなかつたので、青年たちは一途に失望して、不平を起こした。

（吉田作彌口述「同志社全史資料」二『同志社時報』第二百三十四號、同志社、一九二五年）

…君「吉田作彌」は事故の爲め…私「浮田和民」も病氣の爲め一年後れて同年同月「明治九年六月、

浮田記」に卒業し、それから明治十八年まで私は君と殆んど苦樂を共にし且つ所在を共にし、窮通相依り相助けられたのであります。明治九年九月相携へて京都同志社に入學しましたが是より先き私共舊友は一同決心して基督教を奉ずることになりました：

(浮田和民「吉田作彌兄を憶ふ」『めぐみ』第十六號、神戸女學院同窓會、一九三〇年)

第三高等學校再赴任から十二年後、ジェインズは病没し、その翌一九一〇(明治四三)年五月に、熊本洋學校生徒が中心となつて、未亡人フロラに悔やみ状(浮田文庫)と弔慰金^(二六)が送られた。熊本バンドを筆頭^(二七)とする熊本洋學校生徒が弔慰金寄贈者(浮田文庫)の大多数を占める中で、とりわけ、離熊後にジェインズと直接關係を持った唯一の人物―折田彦市―の名前とその弔慰金の額が目を引き。折田は、一八九五(明治二八)年に逝去した上司、井上毅文部大臣に「金壹圓六拾六錢」^(二八)を出金したが、部下ジェインズには一〇円を贈っている。彼の一〇円の弔慰金の意味は、ジェインズのまだ成人していない二人の子供達への氣遣いもあつただろう。折田がこの弔慰金寄贈者名簿に登場する意味は大きく、ジェインズに対して多額の弔慰金を出資していたことで、彼がジェインズに造士館の教職を斡旋し、第三高等學校へ呼び戻した可能性はさらに高くなつたと考へる。

ジェインズの第三高等學校再雇用に際し、「外國教師備入御届」に紹介人はなかつたと記録されている。一八九七(明治三〇)年におけるジェインズの異動は、第三高等學校への再雇用となるため、学校側からジェインズを雇用する要望が強ければ、紹介人の必要はなく、学校の意思はそのまま強いコネクションとなり得る。ジェインズの縣立造士館赴任に関しても、折田彦市学校長が関与した縁故雇用だつたと考えれば、一八九五(明

治二八)年に第三高等學校を満期退職し、一八九七(明治三〇)年に三高に再雇用される約二年間、ジェインズの名前が公文書から消えても不思議はない。さらに、折田は、ジェインズが鹿児島に渡ったあとも、半年間無給の生活を送らなければならなかった故郷鹿児島の教育事情を知っていたはずで、ジェインズの第三高等學校再赴任に際して、鹿兒島造士館から三高までの「金壹百円」の旅費手当や、「当初からの二年契約」の配慮をしたことも頷ける。浮田への書簡⑧から、ジェインズの再来日以降の就職には折田彦市が深く関わり、明治二十八年七月末日の三高満期退職後二か月もの間、官舎にとどまることができたことに加え、造士館への雇入れと第三高等學校の再雇用も、第三高等學校長の折田彦市の許可や紹介で成立した可能性が認められる。筆者が確認する限り、ジェインズが浮田に宛てた書簡はこれらの可能性を今に伝える唯一の資料である。

浮田和民は、最後の書簡⑧日付の三ヶ月後、文部省が旧師の再入洛を認可した頃、東京専門學校に移籍した。

(三) 米国での晩年以降の文書

一八九九(明治三二)年七月末日に三高を満期退職となったジェインズは、「熊本バンドの先輩達がキャプテン・ゼーンズ師と別れる時に送った一大日本風景写真帳」と報じられたアルバムを手に、帰米した(『基督教世界』)。アルバム巻頭のローマ字署名は全員元熊本洋學校生で、熊本バンド以外の生徒の名前が見られる。―市原盛宏、河野鯨雄「北海道廳地質調査鉅床主任」、小崎弘道、金森通倫、藏原惟郭、中原淳藏「当時、東京高等工業教授」、大宮弥平「東京上野駅長(調査中)」、竹下康之「京都郵便局一等郵便局長」、徳富猪一郎(蘇峰)、和田正脩「横浜野澤屋(のち横浜松坂屋)顧問ほか」、浮田和民、横井時雄、海老名喜三郎(彈正)、由布武三郎「文部省参事官、高等商業(現、一橋大学)第三代校長ほか」、加藤勇次郎「熊本バンド、同志社「ハリス」理科学校(明

治二十五年改称) 物理学教授、京都市水利事務所技師ほか) ―

ジェインズと熊本の教え子達との交流は、帰米したジェインズ最晩年まで続く。ジェインズがリウマチのためカリフォルニア州ロスガトス (Los Gatos, CA.) に移り、暖地を求め、ライツ村 (Wrights, CA.) [サンノゼとサンタクララの中間にある村落] の山中に身を「潜め」て一人住まいをしているという記事が掲載された(『大阪朝日新聞』)。その翌月の一九〇五(明治三八)年八月、小崎弘道夫妻は、米国伝道会社の依頼で米国の土を踏み、ライツ村のジェインズを訪ねた。小崎は、旧師が事業に失敗し負債を抱えていることを知ると、サンフランシスコ金門銀行で七〇〇ドルを用立て旧師に送金^(三九)し、帰朝後一年の間に、熊本洋學校出身者呼びかけて一四〇〇円余りを調達して銀行の債務を完済した。小崎の訪問から三年後の一九〇八(明治四一)年六月八日、海老名弾正は、組合教会世界大会に日本代表として英国エジンバラに向かう往路にジェインズを訪ね、小崎、宮川、徳富「蘇峰」、浮田、原田「助」ら洋學校出身者が醸金した見舞金を持参した。フロラが海老名にジェインズの訃報を知らせた書簡^⑨で、「夫の最期の二、三か月、彼の心から不安を除くことができた」と述べたが、海老名の持参した見舞金がその時の経済的支援になったということなのだろう。海老名は復路十一月頃にも師を訪ね、知友のために旧師と記念写真を撮った。^(四〇)翌一九〇九(明治四二)年三月中旬、ジェインズは健康を害してガーデンシティ・サナトリウムで静養したが、老年のため再び健康は回復せず、同月二十七日に召天した。

ジェインズが病没した翌年一九一〇(明治四三)年五月、小崎弘道、浮田和民、岡田松生に、横井時敬「当時、東京帝国大学農科大学教授」が加わって総代となり、弔慰金を添えて、悔やみ状(浮田文庫)をジェインズ未亡人フロラに送付している。弔慰金寄贈者は四十七名で、寄贈金は総額一三三七円五〇銭に上った(浮田文庫)。

明治三十九年に金門銀行への返済金一四〇〇円を醸金した元洋學校生の名前は不明だが、浮田はその一部を醸出しているはずである。ジェインズに対するどの贈呈や醸金においても浮田の名前が挙がっていて、弔慰金を寄贈する際には世話役まで務めた。

四 結びにかえて

浮田は八十三歳まで大学教授を務めた。熊本バンドの多くが、宗教家或いは伝道師として活動した中で、朋友とは道を異にしている。

理論と実践を系統だて、「言行に裏表矛盾のない学匠」浮田が、教員を選んだ理由は、「実際教員以外に能がないと自覚したから」だったという。そのような浮田の講義を、彼の教え子達は、「注込教育でなく、開発主義にて、学生に、自学自修、常に研究努力の習慣を植え付けた」、或いは、「堅い信念を語る態度は学生に深い感銘を与え、極めて謙虚で、飾り気も誇張もない人格は、学生から敬慕された」と回顧した（『浮田和民先生追懷録』、『同志社時報』）。どれをとっても、浮田は旧師ジェインズの流儀を引き継いでいる。

取り上げた七通の書簡は、ジェインズが在米し、かつ、浮田和民がイェール大学に留学した一八九二（明治二五）年から、四年半に亘って浮田に送付されたものである。前妻ハリエットの没後、ジェインズは、五人の实子を教育しながら、米国から同志社の動向を注視した。同志社第二代社長、小崎弘道の紹介で二年間京都第三高等中學校（途中で、第三高等學校に改称）に奉職し、その後、鹿兒島縣尋常中學校造士館の職を得た。しかし、ジェインズが明治二十八年七月末日に三高を退職したあと造士館に奉職するまで、職に就いた記録が見当たらない。つまり、彼は、一年半、浪人の生活を余儀なくされたことになる。

ジェインズは、最大級の責め苦に耐えていたその四年半の間―スカター家とABC FMから迫害を受けていた一時帰米時代と、浪人という試練を味わった再来日―に、多岐に渡る大量の私的情報を同志社教授、浮田和民に送り続けていたのである。

これら七通の書簡のほか、スカター家の醜行を暴露するロイスの供述書や、故人となった夫に代わって、生前の夫への厚情に対し、熊本のボーイ達に感謝の詞を述べるフロラの書簡、或いは、ジェインズへの弔慰金寄贈者名簿など、ジェインズに関する重要文書が、同志社大学でなく、浮田和民の縁で、早稲田大学に現存するという事実は、特記すべき事項である。浮田への書簡が存在しなければ、再来日前後のジェインズの日常を窺い知ることや、再来日後に公文書から消えたジェインズの動向を埋めることは勿論のこと、造士館での奉職や三高への復職に至った経緯―折田校長の援助―を推論することはできなかつたであろう。

自著 *KUNAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism*. (同志社 社史々料編集所) や ABC FM 宣教師書簡 (マイクロフィルム・同志社大学所蔵) では、熱く燃える太陽のように異彩を放ち、「なすべきことは啓発、即ち、教育のみなり」或いは「真正正銘の真実であるなら、どのような場合でもそれは真実でなければならない」というイズムを貫いたジェインズの姿を見ることができた。

一方、ジェインズが浮田に宛てた書簡には、師弟の壁を越えて、個人的なことまで相談できる同志として成長した浮田に甘え、時には、「私が、「鹿児島で過ごした」ここ数か月間、何に対してどれ程苦しんできたのか、君には判らないでしょう。お金さえあれば、とつくに『我が家』に向かつていました―しかし、今の私には、「米国に帰っても」我が家はありません。鹿児島島の役人に説得されて、ここにとどまっている次第です。…京都に住み、せめて折に触れて君達と語り合いたい…：新たな出発に向かつて、何か貢献がしたい…：こちらの暑さは半端でなく、

「京都から離れすぎていて」寂しすぎます。もう一年こちらで孤軍奮闘するのは堪えられません。」(書簡⑧)と、弱気な一面を吐露する俗人ジェインズが描かれていた。それでも、ジェインズにとって、浮田は愛おしい対象に変わりはなく、書簡には、教え子、浮田を思いやる言葉が綴られていた。さらに、書簡からは、浮田が個人的に旧師と交流を持つ中で、旧師が窮地に陥るたびにできる限りの支援をしていたことも読み取れた。

その時期、浮田は、ジェインズに最も近い存在で、ジェインズが全幅の信頼を寄せることのできた人物だった、ということなのだろう。

注

一 J・D・デイヴィスが、以下のように日本の近代化の様子を記し、ABC FMボストン本部のN・G・クラークに宛てて書簡を送っている。

「：日本政府は、この八年の間、郵便局、電信、鉄道、汽船航路を導入して国をまとめ、着実に力をつけ、成長し続けてきました。そして、悉く反乱の芽を摘み、反乱主導者を容赦せず打ち首にして、国の将来を見据えた法律を作りました。さらに、無血の闘いで中国を征服し、朝鮮国を開国させました。武士階級の所得に投資する命令を発し、直ちに国債から二、三年分の所得を捻出したのは、つい二、三か月前のことです。

それでこの問題はすっかりけりがつき、日本は負担となっていた大きな心配の種から解放されたのです。政府がこの命令を出したがっていたという事実は、他国の例を見ると、現在、日本が地球上で最強の国の一つであるという事実を示す証です。日本は、トルコと比べると、磨けば光る御影石のようなものです。：」

二 一九八九(平成元)年、熊本県教育委員会は、「西洋文明、食品なども熊本に初めてもたらした熊本洋学校教師」L・L・ジェインズを熊本県近代文化功労者(故人)として顕彰している。

(熊本県教育委員会『熊本県の近代文化に貢献した人々―功績と人と(平成二十年度近代文化功労者)―」)

三 浮田和民の遺品は、一九六四(昭和三九)年、浮田の娘婿、原安三郎氏(当時、早稲田大学名誉評議員)により、早稲田

浮田和民とL・L・ジェインズ大尉の人的交流―浮田文庫書簡などを通して―

大學図書館校史資料室に寄贈されている。しかし、昭和十三年に逝去した小崎弘道は、浮田の遺族が昭和三十九年に遺品を早稲田大學図書館に寄贈した事実を知り得たはずがない。浮田の没後彼の遺品が遺族によって寄贈されるずっと以前に、浮田は、旧師の遺族から受け取ったジェインズの遺品を彼が長を務めた東京専門學校圖書館に所収していたということなのだろう。ただし、ジェインズの遺族が浮田にどのような遺品を贈ったのかはまだ確認できていない。

四 石井容子『熊本洋學校教師 Carl L. Jones 研究―足跡と功績―』佑啓堂、二〇一三年、四〇五頁。(書簡③ 訳出)

五 石井容子(二〇一三年) 四一〇―一頁。(書簡⑤ 訳出)

六 石井容子(二〇一三年) 四〇〇・〇五頁。(書簡② 訳出)

七 石井容子(二〇一三年) 三九七・四〇〇頁。(供述書① 訳出)

八 ポール・F・ボラー『アメリカンボードと同志社 1875 - 1900』(北垣宗治訳)、新教出版社、二〇〇七年、一二六頁。

九 石井容子(二〇一三年) 四〇六・一〇頁。(書簡④ 訳出)

一〇 「…あの頃、合衆国長老派教会の総会は、『本教会は、国の南部で見られる国内の奴隷制存続が基督敎宗派の妨げにならない」という公認原理に従って、「本来」、教会組合を結束させる目的で組織、継続されている』と宣言した。私の父はその総会の会員で、総会の十二分の一以下のごく少数の反対派として発議し活動した。その件について、反感を買うようなことは一切ない。宗派の警戒心も、ぜひともそしてどんな犠牲を払ってでも教会組織の規範を守るといふ決意も、巨大宗派組織から同じような抗議を受けた。あの悪意に満ちた「南北」戦争はこの振舞いに由来していた…」

一一 第三高等學校「第九一六號、雇外國人満期解備通知」明治廿八年十月三日。

一二 第三高等學校「第九一六號」明治廿八年十月三日。

一三 石井容子(二〇一三年) 四一〇・一四頁。(書簡⑥ 訳出)

一四 フロラは、「二八九四(明治年二七)年」五月十六日にフィロドアを出産した。第三高等學校再赴任中の一八九八(明治三二)年一月二十八日には、アイリス (Iris Janes) が誕生した。

(F. G. Nohelker, *American Samurai: Captain L. L. Jones and Japan*. Princeton: Princeton UP, 1985) p.258.)

一五 Ots Cary to J. L. Barton, Kyoto, May 12, 1896. (ポール・F・ボラー(北垣宗治訳)『前掲書』一六五頁)

一六 石井容子(二〇一三年) 四一七・二三頁。(書簡⑧ 訳出)

一七 鹿兒島県教育委員会・編『鹿兒島縣教育史』下巻、鹿兒島県立教育研究所、一九六〇年、七〇・七一頁。

鹿兒島市史編纂委員会・編『鹿兒島市史』第二、鹿兒島市、一九七〇年、八二八頁。

鹿兒島県・編『鹿兒島県史』第四巻、鹿兒島県、一九七四年、六七三頁。

山下玄洋『中学造士館の研究』山下玄洋、一九九七年、一〇八頁。

官立鹿兒島高等中學造士館は一八九六（明治二九）年九月に廢校となり、本科生徒は、第五高等中學校など他の高等中學校に転校した。予科生徒は、同年十二月に鹿兒島県の管理する鹿兒島縣尋常中學造士館が成立したので、これに収容され、明治三十年一月から授業を始めている。

一八 第三高等學校「第一一二六號、履歷書 第三高等學校雇教師レレイ、レイイング、ゼーンズ」明治卅年八月二日。

一九 石井容子（二〇一三年）四一四・一六頁。（書簡⑦訳出）

二〇 浮田和民夫人は、洋學校及び同志社の同級生である下村孝太郎の妹である。

二一 第四九四號「外国人傭人之儀伺」三十年四月廿三日（第三高等學校關係資料）

二二 文部省文書課、西秘甲二〇三號、明治三十年五月二十一日（第三高等學校關係資料）

二三 第三高等學校「外國教師傭入御届」（第一一二六號）明治三十年八月二日。

ジェインズの再赴任に関して、以下の公文書も入手した。

第三七〇號

第三高等學校傭教師

北米合衆國人 エル、エル、ゼーンズ

第四高等學校傭教師

独逸國人 エミル、ユンケル

右兩名今般御傭入ニ付何レモ奏任ニ準シ身分取扱之儀協議之趣致承知候右ハ何等意見無之候此段及御答候也

明治三十年十一月六日式部長男爵三宮義胤

文部大臣侯爵蜂須賀茂韶殿

二四 巖平『三高の見果てぬ夢―中等・高等教育成立過程と折田彦市―』思文閣出版、二〇〇八年、六〇頁、七二頁。

浮田和民とL・L・ジェインズ大尉の人的交流―浮田文庫書簡などを通して―

- 二五 折田彦市は薩摩藩に生まれ、藩校造士館の出身である。(厳平(二〇〇八年)、一八頁)
- 二六 浮田文庫所蔵。石井容子(二〇一三年)二三六頁(悔やみ状)、一三七頁(弔慰金寄贈者名簿)。
- 二七 旧師への弔慰金寄付者総代は、熊本バンドである小崎弘道、浮田和民、岡田松生に加え、横井時敬が務めている。
- 二八 第四〇六號「故井上子爵教育紀年金」領収書、明治廿八年五月四日。(第三高等学校関係資料)
- 二九 七〇〇ドルは、小崎弘道が『日米新聞』社長、安孫子久太郎の紹介で、金門銀行から借りたものである。
- (小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店、一九二七年、一〇二・一〇三頁)
- 三〇 石井容子(二〇一三年)二三四・三六頁。(書簡⑨訳出)
- 三一 Notcheller(1985), pp.261-498. 大下あや『父海老名彈正』主婦の友社、一九七五年、三七・四〇頁。
- 渡瀬常吉『海老名彈正先生』龍吟社、一九三八年、三二九頁。

参考資料

- James, L. L. *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism*.
 ABCFM. *The Missionary Herald*, Vol. LXXXII. (Boston: Press of Stanley and Usher, 1886)
- 京都大学「第三高等学校関係資料」(京都大学文学書館所蔵)。
- 厳平『三高の見果てぬ夢―中等・高等教育成立過程と折田彦市―』思文閣出版、二〇〇八年。
- 故浮田和民先生追懷録編纂委員會・編『浮田和民先生追懷録』故浮田和民先生追懷録編纂委員會一九四八年。
- 小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店、一九二七年。
- 同志社『ABC FM 宣教師文書』(同志社大学図書館、同人文科学研究所、同神学部所蔵)。
- 同志社『同志社時報』第二百三十四號、同志社、一九二五年十月一日。
- 同志社『廿五年度報告』、『廿六年度報告』、『廿七年度報告』、『廿八年度報告』(同志社社史資料センター所蔵)
- ポール・F・ボラー『アメリカンボードと同志社 1875・1900』(北垣宗治訳)、新教出版社、二〇〇七年。
- 渡瀬常吉『海老名彈正先生』龍吟社、一九三八年。

石井容子『熊本洋學校教師 Capt. L. L. James 研究―足跡と功績―』佑啓堂、二〇一三年。など